

Title	胸廓成形術と空洞直達療法との複合術式の提唱(第4部 外科療法部)(其のI 肺結核の外科的療法の研究その他)
Author(s)	青柳, 安誠; 長石, 忠三; 寺松, 孝; 小林, 君美; 舞鶴, 一; 安淵, 義男; 吉栖, 正之; 香川, 輝正; 久保, 克行
Citation	京都大学結核研究所年報 (1952), 3: 121-121
Issue Date	1952-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/50799
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

胸廓成形術と空洞直達療法との複合術式の提唱

青	柳	安	誠	(京大医学部 外科第二講座)	長	石	忠	三	(京大結研第4部)
					寺	松		孝	
小	林	君	美	(国立比良園)	安	淵	義	男	(国立春霞園)
舞	鶴		一		吉	栖	正	之	
香	川	輝	正	(国立宇多野 療養所)	久	保	克	行	(国立千石荘)

(日本結核病学会第27回総会(昭和27.4)発表予定)

昭和18年以降、我々は79名の肺結核患者に空洞切開術を行い、昭和26年2月以降では更に26名の患者に空洞(又は結核腫)剔除術をも行つた。殊に両者を合せた105例中、65例ではストレプトマイシンやペニシリンの使用下に、我々が案出した「胸廓成形術とそれ等空洞直達療法との同時的複合術式」を施行して良好効果を得た。個々の手術々式や適應症に就ては屢次報告している通りであるが、今回我々は個々の症例を独立的侵襲としての胸廓成形術の場合に比較検討した結果、本法によつて成形術の有する諸欠点を補填し、その手術目的を徹底せしめ得る可能性ある事を知つた。

以下我々の考え方の由つて来る處を全症例105例中、同時的複合術式を行つた65例、殊にその中術後6ヶ月以上を経過した46例に就て説明する。

1) 胸廓成形術と空洞直達療法との同時的複合術式を行つた46例中、所謂死角内空洞、硬化性空洞乃至結核腫又は巨大空洞等があつて、成形術のみでは目的を達し難いと思われるものが30例あるが、その中、26例では成形術と空洞切開術又は空洞乃至結核腫剔除術との複合術式によつて目的が達せられており、下葉空洞や下葉の結核腫で成形術では目的を達し難いと思われるもの4例中、3例では同じく成形術と空洞切開術又は空洞乃至結核腫剔除術との複合術式によつて目的が達せられている。又残余の12例は成形術のみでも目的を達し得るかと思われるものであるが、これ等の例でも全例に目的が達せられている。

2) 又以上の46例中、一應手術目的を達し得た41例では、手術部に相当してレ線的に著明な癭痕收縮像が認められるものが多く、空洞内容物や被包乾酪巢が体外に排除乃至剔除されている事実と相俟つて、主病巣部の癭痕性治癒に向いつゝある事が示されている。

3) 又我々の例では、肋骨切除数は46例中、3本7例、4本15例、5本16例、6本4例、7本4例で、切除肋骨の長さも後腋窩線乃至中腋窩線までのものが最も多く、肋骨切除範囲が同じ病巣に対して成形術のみを行う場合の夫れに比べて遙かに狭少である關係上、胸廓の変形度も亦これに比例して軽度な場合が少くない。

以上で分る様に、胸廓成形術と空洞直達療法との複合術式を應用する事によつて、成形術の欠点を補填し、その手術目的を徹底せしめ得る場合が少なくないから、本術式は今後肺結核外科の進むべき一方向を示唆するものと考えられ、こゝに本法の研究の必要性を提唱する次第である。

遠隔成績は未だ不明であるが、本法は抗生物質や化学療法剤の登場によつて始めて可能となつた手術々式であるから、今後化学療法の進歩發達に伴い、その適應範圍は次第に拡張されるものと予想される。

〔附記〕 我々は第4回日本胸部外科学会(昭.26.10)の席上、昭和26年9月末現在最短3ヶ月以上最長8ヶ年を経過した47例の空洞切開例に就て報告し、これを「治療」第33巻、第12号(昭.26.12)に原著として發表しているが、今回取扱つた105症例中の空洞切開例79例はこれに10月以降の手術例と従前の報告では取扱わなかつた宇多野療養所及び千石荘での我々關係の手術例とを新たに加えたものである。